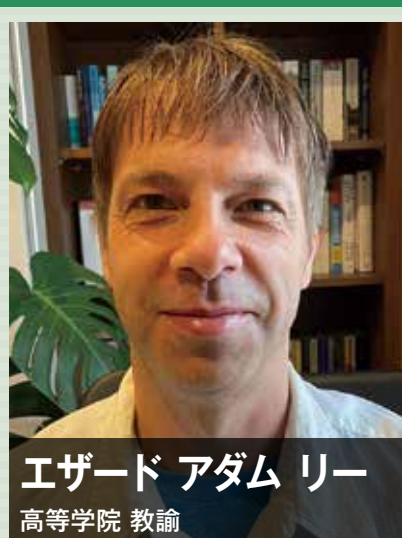


「多読」に焦点を当てた「ブレンド型学習」を採用。わかりやすい目標設定をして学習効果を高めた

早稲田大学高等学院中学部の科目の一つである「総合学習 b」では、「Xreading」を利用して多読に焦点を当てた学習に取り組んでいる。「Xreading」は生徒にとっても教師にとっても使いやすいように、非常に細かい工夫が施された優れたプラットフォームである。エザード アダム リー教諭は「Xreading」の機能を熟知して効果的に運用し、さらに独自の一步進んだ課題を出すなどして、生徒の学力向上に努めている。



エザード アダム リー
高等学院 教諭

多読を中心にした学習に、外部プラットフォーム「Xreading」が奏功

今回 e-Teaching Award を受賞したのは、エザード教諭が教鞭を取る早稲田大学高等学院中学部の「総合学習 b」である。中学部の英語科目としては「英語 a」と「英語 b」がある。それとは別に総合学習という科目として「総合学習 a」と「総合学習 b」があるが、「総合学習 b」は英語のネイティブスピーカーが担当しており、多読「Extensive Reading」に焦点を当てた「ブレンド型学習」を取り入れている。授業時間は 50 分で、1 クラスの人数は 30 人程度。15 ～ 16 人のグループに分けて少人数での授業を行っている。ちなみに「総合学習 a」は英語とは関係がない科目である。

エザード教諭は、2022 年度は 7 年生（中 1）と 8 年生（中 2）の「総合学習 b」を担当し、9 年生（中 3）のオンライン教材を担当した。教諭がこの科目で採用して、非常に効果をあげているのが「Xreading」(<https://xreading.com/>) という外部プラットフォームを中心とした学習プログラムである。

多読「Extensive Reading」とは、英語の授業でよく取り入れられている精読「Intensive Reading」とは対照的な学習法であり、それぞれに特徴がある。精読は、短く難易度の高い文章を読む。精読の目標は、理解度を把握することで、文法と語彙の学習である。クラス全体で取り組むものなので、生徒が読みたいと思う本ではないことが多く、読書のスピードを上げる機会はない。レベルが生徒全員に合っていないことがある。他方、多読は、生徒自身が本を選び、より興味を引く長い本を、各自のペースで読み進めることができる。多彩な語彙や表現を学ぶことができ、読書スピードを上げることができる。生徒自身がより強く興味を持つような学習法であると言える。

「Xreading」は日本の企業が運営する英語多読学習のためのプラットフォームである。多くの教育機関が採用しており、大学や高等学校にも多く採用されているが、中学校で導入しているところはそれほど多くないそうだ。サイトにログインすると、レベル別に分けられたさまざまな英語の書籍を読んだり、音声を聞いたりする。PC、スマートフォン、タブレットなど、どのデバイス

からでも利用できる。「3 年前から、生徒は入学時に PC を 1 人 1 台購入する決まりになったので、それ以降に入学した生徒は、中 1 でも PC を使って学習することに問題はありませんでした。それ以前もこのサイトを使っていましたが、当時はスマートフォンで通学時に音声を聞いている生徒が多かった印象です」。

各生徒のレベルに応じた目標設定ができ、細かい工夫によって容易に運用が可能

授業では、初めの数回にわたって教室で実際に使って導入を行った。その後、各生徒に単語とレベルの目標が設定される。本を選択して読み、それに関するクイズに正解すると目標達成となる。レベルアップのためにはそれぞれ単語数が設定されており、それを読んだことにより達成とみなされる。例えばレベル 1 からレベル 2 に上がるには 5000 単語読む必要がある。読んでもいいし、音声で聞いてもいい。ただし、カンニング行為を防ぐために、1 分間に読んだ単語数を数える機能もあり、1 分に 200 単語以下で読むように指導している。この 1 分間あたりの読書スピードは、ネイティブスピーカーが英文を読む速度を参考に、エザード教諭が設定した。

生徒は、レベル別に設定された単語数のターゲット（目標）を達成すると、内容に関するクイズに答えることができる。それをクリアすると、次のレベルに進むことができる。1 つ上のレベルにしか進めないで、難しすぎる教材を読むことはない。こうした各生徒の学習状況は、「Xreading」のサイト内で教師側が把握することもできるため、特別な作業などは必要ない。このようなことから、生徒にとっても教師にとっても、非常に使いやすく優れたプラットフォームであるとエザード教諭は考えている。

難しい課題である音読や演劇に取り組むことにより、生徒たちが達成感を得られた

生徒は対面のクラス内、または Moodle を通じて宿題を受け取り、提出することを求められた。例えば、決められた期間内に本を読むことなどである。また、さらに理解を深めて応用するた

めの課題も与えられた。音読して録音した音声データを提出したり、感想文や書評を書いたりする、一步進んだ課題である。授業内の大きな行事として、リアルタイムプレゼンテーションを行った。これはスライドショーまたは演劇の形で行われた。演劇の場合、「Xreading」の教材の中から、エザード教諭が選んで、教諭がその本に基づいた台本を作成し、生徒に演じてもらった。これは生徒たちには、難しいけれど、達成感を感じられた課題だったそうだ。「中学生の段階でこのような演劇をするのは難しく、セリフを覚えたりしなくてはならないので大変でした。でも、生徒たちは『難しいけど楽しいからやります』と言って、がんばって劇を成功させてくれました。とても感動しました」。

学習の進行状況を視覚化することを目的として、速読演習という形で、週 1 回、授業中とオンラインの両方で小テストつきの演習を行い、読む速度をグラフに表示した。さらに、モチベーションを高めるための表彰式も行った。トップクラスの生徒は、年齢から考えると信じられないほど多くの単語数を達成したという。

中学生の状況に応じた、達成可能な目標設定をすることでモチベーションを高める

エザード教諭が中学生を指導するにあたって気をつけていることは、ゴール（目標）を与えることだそうだ。「大学生であれば彼らの自主性に任せることもできるかもしれませんが、中学生には達成可能なわかりやすい目標を設定してあげることが大切だと考えています」。その仕組みづくりに「Xreading」の導入は効果的だったとエザード教諭は振り返る。

また、教諭は常に生徒からの質問を Moodle 上で受け付け、サポートする体制も整えている。「中 1 くらいだと『パスワードを忘れた』といったような内容が多いのですが、中 2 以上は日本語で質問してきたら『英語で書いてください』と返していますけれど」

加えて、アンケートなどのフィードバックにより、調整を行いながら、生徒たちのモチベーションを維持している。年一度定期的に行っている生徒への無記名アンケートの結果、生徒はブレンド型学習の目的を理解しており、この科目を履修することで英語の能力が伸びていると感じていることを示していた。しかし、中学